

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：34524

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02376

研究課題名(和文) 地域を超えた教育思想の連続性：大正期信州の自由教育から昭和戦後期関西の同和教育へ

研究課題名(英文) The Continuity of Educational Ideologies beyond Regions: From the Free Education in 1910-20's Shinshu Area to the Dowa Education in the Postwar Kansai Area

研究代表者

岡本 洋之 (Okamoto, HiroYuki)

兵庫大学・現代ビジネス学部・准教授

研究者番号：50351846

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1920年頃の英国 同時期信州 ファシズム期信州 戦後関西の、3地域3時期の教育思想の関連を解明した。

1920年頃の英国ではWEA、同時期信州では土田杏村が、教養教育を追求しつつも、労働者・民衆へのリスペクトが不足していた土田は、WEA年報から労働者の学問的自己教育の文化を学び損なった。だが千代村民は同文化を独自に模索した。

同時期信州から戦後期関西にかけては、中村拓三を介するつながりを確認した。彼は、活動終了後も残滓を遺していた東西南北会の人権主義教育と、白樺派の人間尊重思想を、塩尻小で体得し、両潮流に欠けていた、国家の存在を問う姿勢と社会科学を、戦後関西で補った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第1に、WEA流の学問的自己教育の文化を、千代村民が大要ながら独自に掴んだことを示す本研究は、「主体的・対話的で深い学び」に至る地下水脈の解明に貢献したと考えられる。

第2に、本研究が提起した教育史分析のキー概念たる、学ぶ者や社会の底辺にいる者へのリスペクト(ポール夫妻と、本研究が中村との比較対象とした横田三郎に見られず、土田には不足し、中村は豊かに有していた)は、共生社会実現に向けた研究の新地平を広げよう。

第3に本研究は、理論は事実とは別に産み出され、現実に向けて演繹されるという、土田・横田の立場に立つ限り、上記リスペクトは生まれず、ゆえに教育者はこの立場をとるべきでないことを示唆した。

研究成果の概要(英文)： The author unravelled the concerns of the educational thoughts between 1920s' Britain, the same age's Shinshu, fascistic age's Shinshu and post WWII's Kansai.

Both WEA in Britain and TSUCHIDA Kyoson, a philosopher acted in Shinshu, practised liberal arts education for adults. Although Tsuchida, because of his lack of respecting the general public, missed to learn the autodidact culture from an yearbook of WEA, young people at Chiyo Village almost fully caught it through their own efforts.

NAKAMURA Kozo, a leader of education for liberations of Burakumin people, mainly acted in Kansai, passed his childhood in fascistic age's Shinshu, absorbed the vestiges of 1920s' new education movements, Tozai Namboku Kai and Shirakaba-ha. The former lacked questioning la raison d'etre of states, and the latter lacked social sciences. After WWII Nakamura moved to Kansai, because of the red purge, and mastered the two elements above mentioned.

研究分野：比較教育学(思想史のアプローチ)

キーワード：英国の労働者階級への教養教育 WEAによる学問的自己教育の文化 ポール夫妻提唱のプロレットカルト 土田杏村指導下の自由大学運動 長野県千代村における青年層の学び 長野県における大正期の新教育思潮 中村拓三から子どもたちへのリスペクト 横田三郎の近代主義批判における傾聴すべきほころび

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、今日、子どもたちの多様性を抜きにして教育を語れない時代になったという背景のもとで、「昭和戦後の関西の同和教育には、大正デモクラシー期の自由教育[ママ]に見られた、子どもたちの多様性を重んじる思想が伏流水として存在し、1980年代後半以後に表出して今日の人権教育に至るのではないか?」という問いを立て、これを追究したものである(ここを含め、本項における「自由教育」の語の用法は正しくないことが、後述のように研究により明らかになる。しかし本項では研究開始時の研究代表者の認識に従い、「自由教育」の語を用いる)。

今日の日本は、離婚の増加等により家庭のあり方のパターンが一様でなくなってきたほか、学校での集団生活に適應することの難しい子どもたちが増えている。また多くの外国から労働者が流入しているほか、かつては顧みられなかった性的マイノリティの権利も議論されるなど、「多様化」に向けた社会の変化と議論の深化は避けられなくなっている。

教育の分野においては、これらの問題は今では人権教育で扱われることが多い。しかし今日の人権教育につながる過去の系譜を見ると、その有力なものの一つであった同和教育界は、「多様化」をけっして肯定的に見ていたわけではない。1980年代前半に臨時教育審議会が設置され、学校での習熟度別教科指導や多様な高校づくりが打ち出された際には、同和教育界にはこれに反対してすべての子どもへの平等な学力保障要求を対置する声が強かった。やがて多様化が避けられない時代になると同和教育界は、それまで自分たちが批判していた黒川紀章らが用いていた、多様性を前提とした「共生」の概念を借用するようになった。

研究代表者は、このような動きを見つつ日本教育史を研究してきた結果、幕末から現代までの日本の教育の流れは、子どもたちの多様性を肯定的にみてこれを育てる傾向と、否定的にみて画一化を追求する傾向との相克の産物だと考えるようになった。これに関しては、たとえば大正自由教育[ママ]が子どもたちの多様性を重視したことや、ファシズム期に典型的画一化教育が実施されたことなど、個々の時期についてはすでに数多の先行研究がある。

しかし本研究では、新時代の国民ないし市民をつくる営みたる教育を、旧時代の教育を受けた教員が担う点に着目し、教育思想の連続性を考えた。具体的には「大正期」の教育の余韻を昭和「ファシズム期」に長野県で身につけた教員が、「戦後」に関西で行った教育実践と理論構築を見ることにより、2地域3時期にわたり連続した教育思想を明らかにすることにした(この点は、研究中に発展的に変更した)。研究対象は、同和教育実践者から、やがて理論的指導者の一人になった中村弘三(なかむら・こうぞう、1923~2002)である。彼は戦中期に長野県師範学校で学んだが、同校はかつて子どもの多様性を尊重する大正自由教育[ママ]の一拠点であり、中村在校期にもその空気が残っていたことは間違いない(この点については、事実でないことが研究により明らかになった)。また彼が卒業後に入った同県教育界には「哲学を勉強しなければ一人前の教員ではない、というような気風がぁり」(赤羽七郎治、1974年、48頁)、ファシズム期といえども教員は自分で書を読んで思索し、制約の範囲内でも個々に多様な学びをしていた。

こうして培われた人間の多様性を見つめる視点は、戦後に中村が関西に移り、再び小学校の教壇に立ったときの実践記録からも読み取れる。1956年、貧しさのなかで住民の生活が乱れがちであった奈良県の山村で、教え子の家庭訪問を繰り返した彼は、子どもへの教育を行うために、家庭生活の立て直しを並行させることが必須だと痛感し、次のように書いた。「彼ら[子どもたち]の生活、とは一口にいっても、親たちの生活は、彼らの顔がめいめいちがうよりもっとちがっている。そのなかの彼らの生活とそこから生まれる意識の形は、ちがうのが当然だし、そのおのおののちがいによって、生活のありかたをきめてゆかねばならない(中村、1975年、35頁)。彼は明確に子どもたちの多様性を見ている。

一方、高齢になってから中村は、兵庫県の山あいに合宿施設を開き、1988年に「この山のぼり この畑を耕し 君は君の 人生をうたえ」という書(生活教育研究所編、2003年、221頁)を掲げた。ここにも、個々人の多様な人生を尊重する考え方が見られる。

しかし以上2つのことからの間の時期こそ、同和教育が関西地方を中心として展開され、そこで中村自身が実践と指導に励んだ期間である。この教育は全体として、けっして子どもの多様性をふまえてはいなかった。差別と貧困により、家庭や地域内でいさかいが絶えず、また就職差別が厳しいなかで、いくら勉強をしても子どもたちは結局のところ肉体労働者等にしかならなかった。そのもとで希望を失い、非行・校内暴力に走る子どもたちが少なくなかったもとでは、各人の個性を伸ばす教育など夢物語でしかなかったであろう。教員には、まず地域や家庭の中に表われている問題点を子どもたち自身にしっかりと見つめさせ、次にそれが解決不能なものではなく社会的差別の結果であることを押さえさせ、その上で自分がこれを解決する主体の一人になるのだと決意させる(解放の自覚)ように指導することが求められた。

ただ、この教育を継続的に実践することは必然的に、公立小中学校、すなわち子どもたちが校区から「全入」する学校において、運動家を養成することになる。一方で、同和对策事業のおかげで経済生活が向上し、高校以上の学校に進学を果たした被差別部落の子どもが職業選択の幅を広げ、やがて日本の他地方や海外で働く者も出てきた。これは自然な流れであるにもかかわらず、地域の部落解放運動等にとっては痛手になることから、1985年ころにはそのような子ども

に対し「ムラから逃げる学力」を身につけたと非難する向きもあった。上述の中村の「君は君の人生をうたえ」という書は、まるでこの非難への反論のようである。

ここから研究代表者は、中村が、同和教育の実践者および指導者の一人として、ほかならぬ運動家を養成する教育を展開した1960年代～80年代半ばにおいてすら、心の底ではそのような教育は本来望ましいものではなく、むしろ信州の大正自由教育[ママ]に範をとった、多様な子どもたちの個性を開花させる教育をこそ目指したいと考えつつも、部落差別の実態および同和教育界の状況からみてそれを大々的に打ち出せなかったとの仮説を立て、その論証を試みた。

2. 研究の目的

以上のように、中村研究を通じて、大正期の長野県における自由教育[ママ]の思潮が、昭和戦後の関西における同和教育へと連続していたことを論証するのが、本研究の目的であった。

3. 研究の方法

当初は本研究を近現代日本教育史研究として、中村著作の分析等を中心に行う予定であった。しかし研究を進めるにつれ、当初の計画よりもそれを深めるため、以下2点の変更を行った。

(1) 中村の特色を際立たせるため、同和教育運動において彼の同志であった横田三郎(1923～2010)の教育思想研究を、本研究の一環として加えた。

(2) 研究中に、中村が長野師範卒業後の1942年に赴任した国民学校が、同県下伊那郡にあったことがわかり、かつ同郡は、英国人ポール夫妻(Maurice Eden Paul, 1865-1944; Cedar Paul, ?-1972)の著書 *Proletcult* (Paul, 1921)を読んだ哲学者・土田杏村(1891～1934)の指導で、教師たちをも受講者に含む伊那自由大学(24～29年)が開講された地であることから、当初の「『大正期』の教育の余韻を昭和『ファシズム期』に長野県で身につけた教員・中村が、『戦後』に関西で行った教育実践と理論構築を見ることにより、2地域3時期にわたり連続した教育思想を明らかにする」を、「『大正期(おおよそ1920年代)』の教育の余韻を昭和『ファシズム期』に長野県で身につけるとともに、『1920年ころの英国』の教育思想の影響を受けた自由大学運動の余韻が残る地で仕事をした教員・中村が、『戦後』に関西で行った教育実践と理論構築を見ることにより、3地域3時期(英国 長野県 関西, 1920年ころ ファシズム期 戦後)にわたり連続した教育思想を明らかにする」に変更し、研究方法の基本は文献実証であることに変わりがないものの、研究カテゴリーは日本教育史研究から英日比較教育史研究に発展した。

4. 研究成果

本項の初めに、研究課題名にもある「自由教育」の語についてお断りしておく。これは、新教育思潮の意で用いた語であった。しかし長野県の白樺教育実践者であった一志茂樹は「自由教育」の語を「新教育のうち沢柳政太郎によって唱道された一教育運動の意で用い、わたくしどもは、沢柳氏の自由教育には賛成しなかった」、「信州では、沢柳氏は亡くなるまでとうとう容れられなかった」(一志, 1974年5月, 11頁)と述べていることから、厳密を期するため本研究では用語使用法を改め、一志に従うことにした。

(1) 1920年代の自由大学運動が挫折した原因と、指導者・土田杏村を超えた人々

土田と英国人ポール夫妻に共通した思想的問題点から考える

ポール夫妻は、労働者を搾取してやまぬ資本主義経済への憤りから、世界初の社会主義政権が成立したばかりのロシアに倣い革命の必要性を叫んだ。夫妻は、当時英国で勢力を伸ばしていた労働者向け教養教育機関・WEA(労働者教育協会)が扱っていたギリシア芸術やシェークスピアの類をニセ文化だと非難し、労働者には革命に必要なことだけを集中して教えよと主張した。そこには、多様な知的欲求をもつ個々の労働者へのリスペクトはなかった。

一方、土田は「十分に人間性を発揮した、完全に自由な、同胞的共同社会生活を建設」することを理想としていた(土田, 1924年, 264頁)が、社会の底辺の人々を蔑視する自己を変革しようと苦しみ、臨死体験のなかで、すべての存在がかけがえのない絶対的価値をもつことを悟る。その結果、彼は底辺の人々に思いやりをもって接するようにはなったものの、多くの場合彼らをリスペクトするには至らなかった。

土田はポール夫妻と同じく階級闘争を支持していたので、それを目的としないWEAを手本とせず、階級闘争をふまえて幅広い教養教育を行う自由大学を構想した。したがって土田は思索に際し、WEAを批判するポール夫妻を批判するという回りくどい方法を取り、直接にWEAの運営方法からは学ばなかった。このため土田は、せっかくWEA年報(Cole, et al (Eds), 1918)を手にしながらか、そこに書かれていた、自由な討論と自由な論述を含む学問的自己教育のなかで成長するWEA受講者の記事に学ばなかった。このことが、土田からWEA受講者をリスペクトする機会を奪ったため、彼は自由大学においても討論や小論文作成を通じて受講生を育てる発想をもてなかった。それが、自由大学運動が衰退する主因(内的原因)となった。

しかし、当時青年会自主化を勝ち取り、自由大学で知の刺激を受けた長野県千代村の青年層は、村立図書館を運営して、文献を用いた研究を模索した。残念ながら、適切に問いを立てることも、

それに基づく学問的討論と論述をも知らない彼らは、研究を進められず、以後国策である満蒙開拓に呑みこまれていく。けれども、土田が学び取れなかった学問的自己教育の文化の概要を自力で掴み、その具体化の一手手前にまで迫った彼らの到達点は、教育史上特筆されるべきであろう。

(2) 子どもたちへのリスペクト

大正期信州の新教育を戦後関西の同和・解放教育へと発展させた中村拓三の到達点

自由大学は成人を対象とした教育運動であったが、長野県ではそれ以前にも、同じくいわゆる大正デモクラシーの流行のなかで、新教育が実践されていた。主要なものは東西南北会と白樺派である。東西南北会は、日本が帝国主義世界で生きていくために、教師は教育技術の枝葉にとらわれず、子どもとのふれあいを重んじる人格主義教育により、国家を支える子どもをつくるべきだとした。しかし国家の存在そのものは問い直さなかった。一方、白樺派は国家や社会のあり方を批判的に問いつづけ、子どもの自発性を育てようとした。しかし社会科学的視点はなかった。

中村が塩尻尋常高等小学校尋常科に入学した昭和初期には、両潮流ともすでに無かったが、同小には東西南北会色が残っていた。また同小高等科と農学校在校中に、学びは自発的にするものとの白樺派的考えを強く身につけた彼は、道一筋に学べと説く「信濃の国」の歌詞にさえ憤るほどに自発性を重んじた。こうして彼は、強い米英から弱い日本を自発的に守る志を固め、日米開戦直後に国民学校教員として赴任した下伊那郡で、教え子を満蒙開拓青少年義勇軍に送る。

その子の死を知った中村は、敗戦後、情報を精査したうえで行動方針を判断する子どもづくりに向方向転換した。国家の存在をも問うて東西南北会の思想を超えた彼は、レッドパージに遭う。

京都の部落問題研究所勤務を経て流れついた、奈良県吉野郡の小学校で、彼は子どもへの生活綴方教育と家庭訪問を展開する。喧嘩の様子を日記に書けと促す中村に伝えて子どもがやっと書いた、殴りかかってきた相手の「その手は右手でした」の一言を読み、子どもが「相手のようすをみはじめた」(中村、1975年、25頁)と喜ぶ中村には、子どもへのリスペクトがあった。

また彼は、子どもが受ける情報ともいべき友人・家族の言動を、子ども自身が精査して自分の抵抗感を制御し、自発的に行動方針を判断するよう指導した。この自発性には体系的知識が伴わねばならぬと考えることにより、中村は白樺派の思想をも超えた。こうして彼は、青少年期に受け継いだ長野県の大正新教育思潮を関西に伝えただけでなく、発展させた。

最晩年に至り彼は、パレスチナやアパルトヘイト時代の南アフリカをはじめとする各地の子どもたちが、国家にその存在理由を問いただし、これを改廃し、あるいは新国家を造る権利を認識し行使する様子を文章(同、2003年3月)に書いた。そこには、日本の成人の部落解放運動や解放教育運動に失望しながらも、命がけで闘う世界の多くの子どもたちにはリスペクトを示し、そのような子どもづくりこそが教育の神髄だ、という境地に達した中村の姿が表れている。

(3) 大学教員による政治的プロパガンダとその影響

同和・解放教育の一指導者・横田三郎と学生たち

本研究では本論の最後に、中村と比較して考察を深めるため、彼と同じ同和・解放教育指導者の横田三郎を採り上げた。将来の日本において労働運動と部落解放運動の協力により、社会主義革命が実現すると考えた彼は、両者に共通した運動原理たる集団主義に基づく教育を唱えた。

横田は、著書(横田、1976年)の題名『教育反動との闘いと解放教育』に表れているように、現場で同和・解放教育の実践に苦闘する教師を応援しようとし、マルクス主義の立場から、プラグマティズムを含む近代主義を徹底的に批判する論陣を張った。したがって著作中で彼は、子どもたちが集団主義を身につけ、生きいきとして差別と闘うまでに成長しても、それが子どもたちの試行錯誤の結果であれば、その姿を削除した。しかし連続した事実の部分的削除は、描写されている事実の意味合いをも変え、事実を曲げてしまった。こうして、反プラグマティズムという横田自身の立場は、彼の自縛の紐になり、自由に文章を展開できなくなって、論は破綻した。

かかる状況が生まれた根本的原因は、横田著作のほぼすべてが「真実」の追究ではなく、政治的アジェンダ・ピラと同じく「正義」の主張を目的としていたことにある。

1980年代半ばから後半にかけて書かれた3文章は、それをよく表している。教育に関心をもつ学生向けに書かれた回顧録(同、1987年a)で彼は、自らの中学校生活を軍国主義一色で暗かったと述べ、同和・解放教育実践者に読者が多かった『解放教育』誌に載せたコラム的文章(同、2016年b)では、戦争に対する昭和天皇の無答責を、口を極めて難じている。ところが自分の出身中学校の百年史書に寄せた文章(同、1987年b)では、読者層が限定されているからだとみえて、横田は伸びのびと筆を走らせる。彼は、自分の中学生時代にはまだ本格的な軍国主義教育にはなっていなかったと述べ、軍国主義に抵抗していたとみられる授業等の思い出を綴るなかで、昭和天皇には敬語をさえ用いている。以上3作のうち、前2作は反天皇制・反軍国主義という横田にとっての「正義」を押し出しているのに対し、後1作は本心を綴ったのであろう。

かかる性質をもつ横田著作は、子どもたちへのリスペクトとは、まったく無縁である。またそれらは、少なくとも大学生等の初学者が用いるテキストには適さない。しかし1970~80年代に、彼が勤務した大学の一部の学生たちは、横田著作を理論だと誤解して熱心に学んだ結果、社会主義社会への移行の必然性を確信し、ポール夫妻と同様に、革命の準備に役立たぬと思われたことからを学ぼうとせぬ風潮をすらもつに至った。

やがてこの風潮に閉塞感を覚えた若い学生たちが、横田の思考の枠組みを乗り越えて新しい知を求める胎動を見せたことは、この閉塞感を打破する道が、主体的な知の世界の開拓であるこ

とを示している。

(4) 結論と今後の展望

本研究の結果、「1920年ころの英国」「同時期(大正期)の長野県」「ファシズム期の長野県」「戦後期の関西」という、3地域3時期の教育思想の間には、生きいきとした関連があることがわかった。当初の仮説はまったく否定されたが、その一方で、指導者が遠く英国からもたらされた文化を学び取れなかった一方で、その文化とほぼ同じものを被指導者が、大要だけではあるけれども自力で掴んだことや、故郷を追われた者が生活の糧を求めて流れついた新天地で、故郷の思想を発展させたことなど、ドラマティックな事実を確認できた。

「1920年ころの英国」と「同時期の長野県」の間では、WEAと土田の間に、労働者ないし民衆向け教養教育追求という共通項があったにもかかわらず、土田はWEAから自由な議論と自由な論述、すなわち学問的自己教育の文化(*autodidact culture*)を学びそこなった。しかし千代村の青年たちは、まさにその文化を、WEA流とは知らず、しかも大要だけではあったが、掴んだ。それが具体化されなかったことは惜まれる。

「大正期の長野県」・「ファシズム期の同県」と「戦後期の関西」の間は、中村がリンクとなって、確実に繋がっていることを確認できた。彼は、活動が終わっても長野県の教育風土に残っていた東西南北会の人権主義教育と、白樺派の人間尊重思想を、あたかも空気を吸うように身につけたうえで、両潮流に欠けていた、国家の存在を問う姿勢と社会科学を、戦後に補うことによって両潮流を超えた。

そのうえで本研究が、中村との比較対象として検討した横田は、「真実」を明らかにするのではなく「正義」を主張するなかで、徹底したプラグマティズム批判の帰結として事実を曲げたため、彼の論は理論たる資格を失った。しかし彼が遺した唯一のプラグマティックな言葉である「自分で問題を見つけて、自分で勉強する」(横田, 1976年, 184頁)は、WEA流の学問的自己教育の文化に通じ、傾聴に値する。

なお本研究は、教える者から学ぶ者への、また社会の指導層から底辺層へのリスペクトという概念を副産物として産み出し、今後の教育史研究に使えないかと問っている。ポール夫妻と横田にはこれがおよそ見られず、土田には不足していたが、中村は豊かに有していた。こう考えると、共生(共存)社会をつくることが求められる今日に、この種のリスペクトをキー概念として教育史を見直せば、新たな温故知新の地平が広がるのではないか。

さらに本研究は、以下の課題を導き出した。

第1は、本研究が「大正期の長野県」と「ファシズム期の同県」の繋がりを、下伊那郡を舞台としてはまだ十分に描き出せていないことである。中村が赴任した大鹿村立大河原国民学校の教職員と自由大学運動の間に直接の関連を発見できれば、この点は深められよう。

第2は、戦後関西の同和・解放教育史である。本研究では、中村が小学校での実践者生活を終えてから晩年までの間の指導者生活期間のことを描き出せていない。生活綴方教育を、彼がどう指導し、それがどう現場に生かされたのかを見る必要がある。

引用・参考文献

赤羽七郎治(1974年)「教員生活断章」、『塩筑教育』第3号、東筑摩塩尻教育会、塩尻市立図書館蔵、47~50頁。

一志茂樹(1974年5月)「多分に誤伝評価されつつある大正期信州白樺教育の実態」、『信濃』第26巻第5号、信濃史学会、1~18頁。

尽誠学園百年史編纂委員会編(1987年)『盡誠学園百年史』、尽誠学園。

生活教育研究所編(2003年)『君は君の人生をうたえ』、明治図書出版。

土田杏村(1924年)『教育の革命時代』、中文館書店。

中村拓三(1975年)『解放教育著作集第1巻 部落解放と教育実践』、明治図書出版。

(2003年3月)「遺稿 日本国憲法をめぐる諸問題」、『解放教育』第423号、解放教育研究所編、同社、53~79頁。

横田三郎(1976年)『解放教育全書2 教育反動との闘いと解放教育』、同社。

(1987年a)「わが青春に悔あり」、『創流』第24号、大阪市立大学教育問題研究会、岡本蔵、1~12頁。

(1987年b)「軍国主義下の中学校生活」、尽誠学園百年史編纂委員会編(1987年)722~728頁。

(2016年a)『現代人権教育の思想と源流』、鳥影社・ロゴス企画。

(2016年b)「天皇裕仁は人間なのか」、横田(2016年a)40~42頁。

Cole, G D H, et al (Eds). (1918). *The W.E.A. education year book 1918*, London: Workers' Educational Association.

Paul, Eden & Cedar. (1921). *Proletcult (Proletarian Culture)*, London: Leonard Parsons.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡本 洋之	4. 巻 25
2. 論文標題 土田杏村の彼方に青年たちが見た「学問的自己教育の文化」 英日比較教育史のなかの自由大学運動と長野県千代村の人々	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日英教育研究フォーラム	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡本 洋之	4. 巻 19
2. 論文標題 国家の存在理由を問う子どもづくり 戦後同和・解放教育の一指導者・中村拓三（1923～2002）が到達した教育の神髄	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 龍谷大学教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 57-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡本 洋之	4. 巻 44
2. 論文標題 国家に存在理由を問い、国家を改廃し、新国家を創る子どもづくり 関西における同和・解放教育の一指導者・中村拓三（なかむら・こうぞう、1923～2002）が到達した教育の神髄	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西教育学会年報	6. 最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡本 洋之	4. 巻 2019
2. 論文標題 研究ノート・「総合的な学習の時間」と真の「生きる力」を貫くものを考える 静岡県岡部町立 / 藤枝市立岡部中学校関係資料を手がかりとして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 兵庫大学・兵庫大学短期大学部教職・学習支援委員会年次報告書	6. 最初と最後の頁 86-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本 洋之	4. 巻 第18号
2. 論文標題 大学教員による政治的プロパガンダとその影響 同和・解放教育の一指導者・横田三郎(1923-2010)と学生たち	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 龍谷大学教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本 洋之	4. 巻 第43号
2. 論文標題 同和・解放教育の一指導者が問いかける教育論のあり方 横田三郎(1923-2010)はなぜ立ち上がる子どもを描かなかったか?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西教育学会年報	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本 洋之	4. 巻 第16号
2. 論文標題 研究ノート・「共生」とは異なる「摩擦を経た共存」 解放教育の一指導者・中村拡三(なかむら・こうぞう, 1923~2002)が奈良県吉野郡の小学校で目指したもの	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報 教育の境界	6. 最初と最後の頁 133-156
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件(うち招待講演 0件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 指導者・土田杏村の彼方に青年たちが見た「学問的自己教育の文化」 英日比較教育史のなかの伊那自由大学
3. 学会等名 2020年度関西大学教育学会大会(Zoom使用オンライン発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 英日比較教育史のなかの伊那自由大学と長野県千代村の人々 指導者・土田杏村の彼方に青年たちが見た「独学の文化」
3. 学会等名 大阪市立大学教育学会第10回大会（Zoom使用オンライン発表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 土田杏村が英国の労働者教育協会（WEA）から学びそなったこと 自由大学運動の衰退原因を探る
3. 学会等名 関西教育学会第72回大会（誌上発表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 独学文化を批判した者、掴みそなった者、展望した者 1920年代を中心とする成人向け教養教育の英日比較
3. 学会等名 2020年度Dongbug Asia Munhwa Hakhoe（東北アジア文化学会）ほか秋季聯合国際学術大会（誌上発表）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 自由大学運動の弱点 土田杏村と英国人ポール夫妻(Eden & Cedar Paul)に共通した教育観から考える
3. 学会等名 教育史学会第64回大会（Zoom使用オンライン発表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 1920年代の自由大学運動が挫折した原因が問いかけるもの 本当に必要だったのはころざし? 思いやり? それとも.....
3. 学会等名 教育の境界研究会2020年9月例会 (Zoom使用オンライン発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 土田杏村の自由大学理念構築をめぐる問題 ポール夫妻 (Eden & Cedar Paul) の労働者教育観との共通点から考える
3. 学会等名 日英教育学会第29回大会 (Zoom使用オンライン発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 土田杏村の自由大学理念構築に関する問題点 英国労働者教育についての情報受信を中心に
3. 学会等名 日本教育学会第79回大会 (誌上発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 教養教育運動の指導者・土田杏村の思索の回りくどさ 英国の労働者教養教育に直接学ばず、それを批判する者を批判して論を構築する
3. 学会等名 2020年度Dongbug Asia Munhwa Hakhoe (東北アジア文化学会)・釜慶大学校人文韓国PIus(HK+)事業団春季聯合国際学術大会 (誌上発表) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 同和教育が生み出した「摩擦を経た共存」の人間関係 奈良県における中村拡三（なかむら・こうぞう，1923-2002）の実践記録を読み直す
3. 学会等名 全国地方教育史学会第42回大会（於・東京都板橋区・大東文化会館）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 国家の存在理由 太平洋戦争直前・直後における信州の教育風土と，昭和戦後期関西の同和教育のつながりを考えるなかで見えてきたキー概念
3. 学会等名 2019年度東北アジア文化学会国際学術大会〔夏季大会〕（於・カザフスタン共和国・カザフアルバイカーン国際関係世界語学大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 大正期信州の社会と教育が，昭和戦後期関西の同和・解放教育に影響を与えた可能性 中村拡三（なかむら・こうぞう，1923～2002）をキーパーソンとして考える
3. 学会等名 教育史学会第63回大会（於・静岡大学静岡キャンパス）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 あらゆるものの存在を自発的に問い直す 関西における同和・解放教育の一指導者・中村拡三（なかむら・こうぞう，1923～2002）が到達した理想の子ども像
3. 学会等名 2019年度東北アジア文化学会ほか秋季聯合国際学術大会（於・韓国釜山広域市・東亜大学校）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 あらゆるものの存在を自発的に問い直すこと 関西における同和・解放教育の一指導者・中村弘三（なかむら・こうぞう，1923～2002）が到達した教育の神髄
3. 学会等名 関西教育学会第71回大会（於・関西学院大学上ヶ原キャンパス）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 国家は人工的につくられた可変なもの 同和・解放教育史研究のなかで見えてきた，つい忘れられがちなこと
3. 学会等名 2019年度関西大学教育学会大会（於・関西大学千里山キャンパス）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 国家を含め，あらゆるものの存在理由を問う子どもづくり 戦後解放教育の一指導者・中村弘三（なかむら・こうぞう，1923～2002）が到達した教育の神髄
3. 学会等名 大阪市立大学教育学会第9回大会（於・大阪市立大学杉本キャンパス）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 [論文完成報告] 国家を含め，あらゆるものの存在理由を問う子どもづくり 戦後解放教育の一指導者・中村弘三（なかむら・こうぞう，1923～2002）が最後に到達した教育の神髄
3. 学会等名 教育の境界研究会2020年1月例会（於・茨木市福祉文化会館）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 集団主義教育の実現可能性を疑う自分自身との闘い 大阪を中心とした同和・解放教育の一指導者・横田三郎（1923-2010）の生涯
3. 学会等名 全国地方教育史学会第41回大会（於・名古屋大学教育学部）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 The Lifelong Struggle against Himself Doubting His Own Theories of “ the Education of Peace, Democracy and Science ” : A Case-Study on Yokota Saburo (1923-2010), One of the Theoretical Leaders of Education for Liberation Especially of Burakumin People
3. 学会等名 東北アジア文化学会第36次春季国際学術大会（於・North-Eastern Federal University in Yakutsk）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 解放教育の実現を不可能とみる自分自身との闘い 昭和戦後期における同和・解放教育の一指導者・横田三郎（1923-2010）の生涯
3. 学会等名 教育史学会第62回大会（於・一橋大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 「解放の学力」論を考案した中村拓三（なかむら・こうぞう，1923-2002）の教養 和歌山県新宮市と奈良県吉野郡の教育に関する文章から考える
3. 学会等名 東北アジア文化学会第37次秋季国際学術大会（於・韓国・光州広域市・亜細亜文化院）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 同和・解放教育の一指導者が問いかける教育理論のあり方 横田三郎(1923-2010)の文章をどう読むべきか
3. 学会等名 関西教育学会第70回大会(於・関西福祉科学大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本 洋之
2. 発表標題 「解放の学力」論の考案者・中村拓三(なかむら・こうぞう, 1923-2002)の思想形成 昭和戦後期の紀伊半島における林業の変化との関係
3. 学会等名 大阪市立大学教育学会第8回大会(於・同大学学術情報総合センター)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岡本 洋之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 著者発行	5. 総ページ数 103
3. 書名 リスペクト 英日比較を含む教育思想史研究から見えてきた今後の教育のキー概念	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金子 哲 (Kaneko Satoshi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------